「男、突っ走る！」

第39回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

福沢　瑞枝（19）　名古屋芸術専門学校1年生

加藤　直也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

大久保　正樹（23）　名古屋芸術専門学校1年生

植野　雪奈（19）　名古屋芸術専門学校1年生

船倉　篤志（19）　名古屋芸術専門学校1年生

野添　美南（20）　名古屋芸術専門学校1年生

山口　拓海（19）　名古屋芸術専門学校1年生

安永　和也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

1

名古屋芸術専門学校・５階・５０２教室

雅也、美南、その他生徒たちがパソコンで作業をしている。

雅也「よし、データ入稿完了」

美南「こっちも。データ修正の連絡さえなければ、これで大丈夫」

雅也「長かったね、これまで。お疲れ」

美南「それはお互い様だって。本を作るのも楽じゃないね」

雅也「こんな思いするのは、しばらくごめんだね」

美南「私も。何だか疲れちゃった」

雅也「先輩たちとは上手くいってるの？　結構自分勝手な先輩たちだから、振り回されてるんでしょ」

美南「まあね……」

雅也「他の専攻でも、あの先輩の話は有名だから」

美南「そうみたいだね」

雅也「ナミも無理しないようにね」
美南「うん……」
と、篤志が入ってくる。
篤志「良かった。うっちー、ここにいたんだ」
雅也「どうしたの、あつぽん」
篤志「パネルのカッティング作業、手伝ってほしくて」
雅也「良いよ。ちょうど、こっちは入稿作業終わったところだから」
篤志「良かった」
雅也「あつぽんは、ゲーム制作のほう大丈夫なの？」
篤志「俺の担当箇所はもう終わった。今は、おっくーとやっスーが中心になって動いてる。その間は、実行委員会の仕事やろうと思って」
雅也「そっか。カッティング作業は、どこでやってるの？」
篤志「六階」
雅也「じゃあ、先行っててて。俺も荷物まとめ

てすぐ行くから」

篤志「分かった、ありがとう」

と、出ていく――雅也、荷物をまとめ始める。

美南「卒業進級制作展実行委員会も、忙しそうだね」

雅也「イベントが終わるまで、何だかんだやることが多いからね」

美南「よくやるわ。私なんて、合同文芸誌の準備と先輩の手伝いだけで限界」

雅也「実はさ、俺も、実行委員会のほうで先輩と上手くいってなくてね」

美南「そうなの？」

雅也「実行委員長やってる先輩、結構ワンマンな人でさ。俺が何か手伝おうかと思って声かけても、自分でやるから良いって言われて。だから、ああやって何か手伝ってほしいって言われたほうが、かえって嬉しいの。アテにされるうちがハナだよ。何も声がかからなくなったらおしまいだもん。特

に俺たちなんて、才能や腕がなきゃやってられない仕事なんだもん。だから、声がかかることをありがたいと思って、頑張らなきゃね」

美南「それもそうだね」

雅也「じゃあ、行ってくる」

美南「行ってらっしゃい」

雅也、鞄を持って出ていく――見送る美南。

2　同・6階・601教室

雅也と篤志が、パネルの切断作業をしている。

N「卒業進級制作展の実行委員会は、通常の授業や製作時間の合間にやらなければいけないことがそれなりにあり、学生たちにおっては時間のやりくりが大変な時期でもありました。中には、朝の学校開校時間から、閉館時間の九時まで、ほぼ缶詰の状態の学生もいました。そんな準備に追われている

と、時間が経つのはあっという間で、卒業進級制作展の本番まで、残り四日となりました」

3　同・5階・502教室

段ボール箱を開ける雅也と美南――

『10.S　Album』という表紙の文庫本が大量に詰め込まれている。

雅也「ついにできたね、『10.S　Album』」

美南「うん。私たち一年生にとって、大事な作品集になったね」

雅也「自分の好きなアイテムをキーワードに短編小説を書くなんてやったことなかったから、大変だったわ」

美南「そりゃ、元々シナリオで入ったんだもんね。苦戦するのも無理ないわ」

雅也「これ、何冊かもらって良い？」

美南「良いよ」

雅也「ありがとう。どうしても、渡したい人がいてさ」

4　同・4階・廊下

雅也が文庫本を篤志に渡す。

雅也「はい、これ。あつぽんに渡そうと思って」

篤志「ありがとう。うっちーの作品、読んでみたかったんだよね」

と、エレベーターが開き、瑞枝が出てくる。

瑞枝「おつかれ、うっちー」

と、雅也のデコを叩く。

雅也「あのさ、少しは手加減してよ」

瑞枝「ごめんごめん。（と文庫本を見て）もしかして、うっちーたちの作品、できたの？」

雅也「うん。それを、あつぽんに渡そうと思ってね」

瑞枝「私も見ても良い？」

雅也「どうぞどうぞ」

と、篤志の隣に座る瑞枝。

篤志「福本さん、俺、目次見ただけで、うっちーの作品がどれか分かっちゃった」
雅也「うそ、マジで？」
篤志「ある意味、分かりやすいよ」
瑞枝、篤志から文庫本を借りると、目次ページを開く。
瑞枝「全部で九作品あるわけでしょ。九分の一の確率……。あ、私も、タイトル見てすぐ分かっちゃった」
雅也「みずちゃんも？」
瑞枝「だって、こんなタイトル、うっちーしか思いつかないでしょ」
篤志「それは言えてる」
雅也「じゃあ、言ってごらんよ。作品のタイトル。俺が書いたやつの。俺がせーのって言ったら言ってよ」
瑞枝「分かった」
篤志「任せろ」
雅也「行くよ。せーの……」
瑞枝・篤志「『白寿の万年筆』」

雅也「正解、お見事」
瑞枝「やっぱりね」
篤志「そうだと思ったんだよ」
雅也「よく分かったね」
瑞枝「『白寿の万年筆』なんて渋いタイトル、うっちーにしか書けないでしょ」
篤志「それが、うっちーワールドなんだよ、きっと」
瑞枝「確かに。うっちーならではの世界観っていうのができてて良いよね」
雅也「読んだら感想聞かせてね。と言っても、普段シナリオしか書いてないから、あまり小説と言えるかどうか分からないけど」
瑞枝「大丈夫。うっちーの世界観を楽しむから」
雅也「ありがとう」
と、雪奈が階段を上ってくる。
雅也「おつかれ、ゆきちゃん」
雪奈「おつかれ」
篤志・瑞枝「おつかれ」

雅也「しばらく学校で見かけなかったから、
何か久しぶりな気がする」
雪奈「雑貨の授業を担当してる先生が関わっ
てるイベントに出店する準備してたの」
瑞枝「卒業進級制作展の準備もあるのに、ダ
ブルだと大変でしょ？」
雪奈「まあね。元々私たちの専攻は、人でが
少ないから尚更だよ。それに、全員が全員
ちゃんと手伝ってくれるわけでもないし」
雅也「みんな、それぞれに忙しいんだ」
雪奈「（瑞枝たちを見て）何読んでるの？」
篤志「うっちーの新作」
雪奈「新作？」
雅也「制作展に出す文庫本が、ちょうどでき
あがったの。それで、あつぽんに渡そうと
思って」
瑞枝「（文庫本の目次ページを雪奈に見せて）
ねえ、ゆきちゃん。この目次見て、うっち
ーの作品、どれか分かる？」
雪奈「（目次を見て）うーん……あ、分かっ

た。『白寿の万年筆』でしょ」
雅也「何でみんな分かるの」
雪奈「やっぱり当たってた？」
瑞枝「うん」
雪奈「何となく、うっちーがつけそうなタイトルに見えたから」
雅也「そうかなぁ」
雪奈「ちゃんと、うっちー独自の世界観が作られてるって証拠だよ」
雅也「ありがとう。これからも、うっちーワールド全開で書かせていただきます」
瑞枝「その調子じゃなきゃね」
笑い合う一同。

5　同・５階・５０２教室
完成した文庫本や雑誌などを仕分けしている美南――その顔は、酷く疲れ切っている。

6　同・４階・４０１教室

パソコンで編集作業をしている瑞枝―
―正樹と直也が入ってくる。
瑞枝「良かった、二人ともグッドタイミング」
正樹「何かあったのか？」
瑞枝「オープニング映像で、テロップの修正
があったんだって」
直也「はぁ？　このタイミングで修正とか、
勘弁してくれよ。イベントまで、あと四日
だぞ」
瑞枝「（不機嫌そうに）分かってるよ。確認
したら、元の素材データのほうが間違って
たんだって」
正樹「まあ、イベント前で良かったよ。俺も
手伝う」
瑞枝「ありがとう」
直也「呑気だな」
正樹「グチグチ文句言ってたってしょうがな
いだろ。本番を万全な状態にするためには、
これぐらいのハプニング乗り越えないと」
直也、不機嫌そうに椅子に座り、パソ

コンを起動する。

直也「眞榮田と長井はどうしたんだよ？」

瑞枝「二人ともバイトだって」

直也「イベント間近に、何やってんだか」

瑞枝「バイトなんだもん、しょうがないでしょ」

直也「けどさ、卒業進級制作展の日程はあらかじめ分かってるわけだろ。それに、こういうトラブルもあることを想定したら、このタイミングでバイトのシフトなんていれるか、普通？」

瑞枝「それぞれに都合があるんだから、そんな風に文句言っても仕方ないでしょ」

直也「あいつらがいないってことは、俺たちへの負担が増えるってことなんだよ」

正樹「だからって、今になって二人を呼び出すわけにもいかないだろ。こういう時は、できる人が対応しないと」

直也「勝手なんだから」

瑞枝「来れないものは、もうどうしようもで

きないでしょ。こうやって、私たちが対応すれば、次何かあった時に、逆に助けてくれるかもしれないじゃん」

直也「そう上手くいくものかな」

正樹「ほらほら、文句言う暇があったら、さっさと作業進めちゃおうよ」

瑞枝「そうそう」

憮然としている直也。

6　同・6階・601教室

篤志、拓海、和也が、パネルの切断作業をしている。

拓海「全然終わんねえ」

和也「何枚あるんだよ、全部で」

篤志「今日はほぼ一日、ここでカッティング作業やってて、みんなにも手伝ってもらっても、まだ終わらないんだよな」

和也「（時計を見て）もう八時か。あと一時間で校舎閉まっちゃうよ」

篤志「今日中に終わらせようと思ったけど、

こりゃ無理かな」
拓海「一時間で終わる枚数じゃないもん、これ」
篤志「だよなぁ」
和也「実行委員会がこんなにも大変だとは思わなかった」
篤志「それは言えてる」
拓海「イベントの準備って、大変なんだな」
篤志「まあ、俺たちは一年生だから、分からないことが多くて当然だろ。来年の準備は、もっとスムーズにいけると良いんだけどな」
和也「来年も実行委員やるの？」
篤志「俺はそのつもりだよ」
拓海「俺も」
和也「やっぱ、そうだよね」
篤志「よくよく考えたら、俺たち三人とも専攻違うけど、学園祭のお化け屋敷をきっかけに、こうやっていろんなところで一緒になってるんだよな。俺はゲームプランナー専攻、やっすーはゲームプログラマー専攻、

ぐっちはコミックイラスト専攻。やっすーとは、ゲームの授業で一緒だけど、ぐっちとは授業被ることないだろ。それでも、こうやって一緒に作業したり遊んだりできるのって、良いことだよな。それに、今回の実行委員会もそうだけど、こういう有志の集まりって、いつも同じようなメンツが揃ってるよな。おっくーもそうだし、うっちーもそうだけど、メンツがある程度固まってると、お互いに気心知れてるから、やりやすい気もするんだよな。一年あっという間に終わっちゃったけど、二年生でもそうやってみんなと一緒に何かやれたらなって改めて思うんだよ。せっかくできた関係性だからさ、ある意味では財産になるだろ。それによく考えてみたら、この一年、お化け屋敷以外にもバーベキューしたり、ご飯行ったり、アメリカ研修も行ったり、何というかこの一体感がすごいなって気がするんだ。鈴本先生だって、こんなにも専攻の

違う者同士が集まってるのは異常だって仰ってたし、そういう面では、この恵まれた環境をずっと続けていきたい」

拓海「あつぽんの言う通りだよな。俺たち、いろんな専門知識を持った学生の集まりなんだ。来年は、みんなで何かやりたいよね」

和也「俺さ、ずっと考えてたことがあるんだけど……」

拓海「何？」

和也「来年度の学園祭のお化け屋敷、リーダーやろうかなと思って」

篤志「マジか？」

拓海「すげえ決断だな。開校以来伝統のある学園祭名物企画のリーダーなんて」

和也「二人にも、また手伝ってほしくて」

篤志「もちろんだよ」

拓海「俺だって。来年、お化け屋敷の企画があるなら、またやりたいって思ってた。けど、トップに立つ器はないしさ……。けど、やっすーがリーダーやるなら、俺も安心し

て一緒に実行委員やれる気がする」

和樹「二人ともありがとう」

篤志「さて、その来年を頑張るために、今、目の前のことを全力でやりますか」

和也「そうだね」

拓海「よし、残り一時間頑張りますか」

N「卒業進級制作展に展示する作品作りなど、どの専攻もギリギリまで作業に追われながら、二日間に渡るイベントは、何とか終えることができました。実行委員会でやる作業量は尋常じゃないぐらい多く、それぞれに大変な思いもしましたが、何とかイベントが終わったことにホッとしていました。しかし、イベントが終わった翌日、僕は実行委員長を務めていた先輩から、『実行委員会の副委員長として、何の役にも立っていなかった』という苦言の長文ＬＩＮＥが送られてきてしまったのです」

7　同・４階・男子トイレ（数日後）

雅也が個室に入った状態で、スマホを見ている――憔悴しきった顔で、鍵を開けて出てくると、直也が入ってくる。雅也、気まずそうなをして、小走りで去っていく――怪訝な顔の直也。

8

同・5階・502教室

雅也がしょんぼりと座っており、大きな溜息をつく――ドアが開き、直也が入ってくる。

直也「おい、どうした？」

雅也「何が？」

直也「何がって、お前、すごい暗い顔してるぞ」

雅也「そうかな」

直也「負のオーラ背負ってますって、誰が見ても分かる状態になってるぞ」

雅也「ふーん」

直也「お前、本当に大丈夫か？」

雅也「加藤」

直也「何だ？」

雅也「ごめん、ちょっと一人にしてくれるかな」

直也「……分かった」

気まずそうに、やりきれない顔で出ていく直也――大きな溜息をついて、椅子にもたれる雅也。

N「先輩と上手くいかなかったのは、僕だけではなく、ナミも同様でした。卒業進級制作展が終わると同時に、ナミは学校にも来なくなってしまい、僕が送ったＬＩＮＥにも返信はおろか、既読すらつかなくなっていました。このイベントがきっかけで、学校内の環境が変わろうとしているのは確かなことでした。そして、心配してくれた加藤には申し訳なかったのですが、今の心の内をどうしても打ち明けたいと、僕はゆきちゃんに、ＳＯＳのＬＩＮＥを送っていたのでした」

11　地下鉄・ホーム

電車を待っている雪奈が、スマホを見ている――雅也からのＬＩＮＥを見る。

雅也の声「大分、メンタル的にヤバいです……」

雪奈「うっちー……」

と、慌てて返信をする。

雪奈の声「今、学校？」

と、雅也から返信が来る。

雅也の声「うん」

と、返信する雪奈。

雪奈「すぐに向かうから、待っててて」

不安な顔の雪奈。

つづく